

編集後記

昨年四月七日に「古井由吉自撰作品」刊行を記念して、「古井由吉と文学の四〇年」と題するトークショーが開催された。出演者は古井由吉氏の他に、高橋源一郎氏・堀江敏幸氏・朝吹真理子氏であった。高橋源一郎氏の司会で、高橋氏を含む三人が古井由吉作品との出会いや古井由吉氏への質問などを順に述べて行った。古井由吉氏の文体は、周知のごとく難解なほうに属するが、一方、その話し方は明晰で、淡々としていながら、その中に毅然とした人生態度が表れていて、感銘深いものがあった。次の二点がとくに印象に残った。

古井由吉氏は一九三七年の生まれで、東京と岐阜と二度の空襲体験があり、そのために空襲という死の恐怖が体内に入り込んでしまった。だから、平和であるほうが間違いで、今度の大地震も、実相が現れただけのような気がする」と述べた。次に、朝吹真理子氏の、小説は書けば書くほど未知の分野が広がってくる、どう書き続けて行ったら良いのかという問いに、そんなものは無い、一作品一作品が勝負なのだと、きっぱりと述べられた。

九〇分という限られた時間のトークショーだったので、ゲスト三人の話が切り結ぶことなく終わってしまい、その点は物足りなかった。しかし、古井由吉氏の四〇年にわたり、文壇に迎合せず、我が道を淡々と歩いてこられた姿勢が、その風貌からも窺われて、有意義な時間であった。

我々の論文も長い積み重ねの上に成り立っているのだが、しかし、取り組んでいるときは、過去の蓄積に頼ることもできず、一論文一論文が勝負なのだという気がする。その意味で、作家と同様、しんどい営みである。

新年を飾る「日本文学紀要」に一〇編の論文を載せることができた。御寄稿下さった方々に、深甚の謝意を表す。

(K・Y)

編集委員 齋藤 彰
山田 潔
久下 裕利

学苑 八百六十七号

定価 八四〇円(本体八〇〇円)

購読料 一カ年分 一〇〇八〇円

(本体 九六〇〇円)

平成二十四年十二月二十日 印刷

平成二十五年 一月一日 発行

編集発行人 山田 田 潔

印刷所 三 秀 舎

発行所 昭和女子大学

近代文化研究所

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂一ノ七

電話 03 (三四一) 五三〇〇

☆掲載論文の無断転載を禁じます。